

氏名 久 洋子 (ひさ ようこ)

職名 教育学部 准教授

最終学歴 聖和女子大学大学院教育学研究科
幼児教育学専攻修士課程

学位 教育学修士
論文題目：「幼児の時間概念の発達に関する一考察」



主な職歴 1976年 聖和女子大学附属南聖和幼稚園教諭
1985年 聖和大学附属北聖和幼稚園主任教諭
1987年 聖和大学附属聖和幼稚園主事・主任教諭 (兼任)
1989年 聖和短期大学部保育科非常勤講師 (2009年3月まで)
1995年 聖和大学附属聖和幼稚園副園長 (2006年3月まで)
2006年 聖和大学附属聖和幼稚園園長 (2008年3月まで)
2007年 聖和大学教育学部幼児教育学科非常勤講師 (2009年3月まで)
2008年 聖和大学教育学部幼児教育学科准教授 (2009年3月まで)
2009年 関西学院大学教育学部准教授 (現在に至る)

その他 1995年 キリスト教保育誌カリキュラム執筆委員 (1996年3月まで)
2000年 キリスト教保育誌保育実践研究委員 (2010年3月まで)

専門分野 幼児教育学
保育者論 キリスト教保育

主な著書・論文等

- 1 「保育環境としての植物一草・花・木と子ども」 (共著) (建帛社、1988)
- 2 「幼稚園・保育所・施設—実習ガイドブッカー」 (共著) (学術図書出版社、1992)
- 3 「幼児教育課程論入門」 (共著) (建帛社、1993年)
- 4 「幼稚園教育実習」 (共著) (建帛社、2010)
- 5 「キリスト教保育の恵みと希望 (一) 神様の愛は、今、ここに」 (論説) (キリスト教保育連盟、キリスト教保育誌、第53号、2011)
- 6 「キリスト教保育の恵みと希望 (二) 祈りを計画・実践・省察へ」 (論説) (キリスト教保育連盟、キリスト教保育誌 第54号、2011)
- 7 「実習における「自己課題」に関わる指導方法の探究—「自己教育力」の育成の観点からのアプローチ」 (論文) (関西学院大学教育学部 教育学論究 第3号、2011)
- 8 「保育者論」 (共著) (みらい出版、2012)
- 9 兵庫県研究委託「幼稚園と家庭との連携に関する研究」 (1985・1986年) 研究発表 西宮市民会館 (研究報告書 (p.70) 聖和大学附属北聖和幼稚園 教諭共著)

キリスト教保育の恵みに生かされて

久 洋 子

私が32年間勤務した聖和キャンパス内の聖和大学附属幼稚園（南聖和、北聖和、聖和幼稚園）の源流は、広島で、1886年に関西学院創立者 W. R. ランバス一家の援助、礎石によって砂本貞吉が創設した広島英和女学校に、N. B. ゲーンズが「幼子をキリストへ」の祈りのもとに1891年に創設された広島英和女学校附属幼稚園である。

草創期の保育は、米国で幼児教育を学んだ保育者も多く、子ども理解に基づく先進的な保育の方法、内容の研鑽に努め、創立当初より家庭との連携のための「母の会」を実施する等、日本の幼児教育の先駆的役割を担ってきた幼稚園である。

私は、この歴史ある園の4歳児クラス担任に重責の不安を抱いて就任したが、主任の小出満喜子先生、先輩の先生方が、「保育者同士は神様の『召命』による同労者」として、一人ひとりの今を尊重する精神で新任教諭の指導に努めてくださった。保育者として、保育技術のみならず、子ども、同僚、保護者、実習生との出会いも『自分を愛するように隣人を愛する』、この御言葉を覚えて、共に育ち合い生活を創り出す歩みの大切さを学ぶことができた。

子どもたちは毎日、保護者と一緒に登園し、保育者共同体の中で、日々自らを委ね尽くして徐々に自己を発揮して遊び、仲間と笑ったり、泣いたり、葛藤の体験をしながら「今」を懸命に生きる。「先生、私、僕を見守っていてね」と心の声を発信し続けている。先生をよく見ている。一例であるが、「先生はいつも聖書の話をして大切、大切って言うてるよ。だから、誕生日に一番大切な聖書がほしいんだ！」と母親にねだった5歳児のA男…、保育者から単なる知識ではなく、価値あるもの、人生の歩みに大切なことを吸収、探索しながら生きている。

子どもたち一人ひとりが愛されている喜びを実感できる「今に希望」を抱き、自己肯定感を育み、互いの違いを認め合う心、自主性、想像性、創造性、感謝する心、情操豊かな人格形成を培う保育のあり方を教諭一同が祈りを共にして探究し、省察するキリスト教保育は神様の恵みに生かされた業である。

この幼児教育、キリスト教保育の理論と実践の基盤は、園長の山川道子先生が、保育者としての体験を経てから米国の大学院留学での幼児教育研究を生かして、日本初の幼児教育学科4年生大学課程、大

学院の開設により構築された独自の教育課程での学びにあった。

私の在学時代の幼児教育学科の同級生69名は、先生方と共に毎日の礼拝に出席、必須科目のキリスト教保育、2つの附属園での多くの参観実習、キリスト教主義園、公立園での実習、東京都、大阪府内の特徴的な園参観後の協議、授業「労作」では、自分たちの使用する教室やトイレの清掃等の体験から、幼児教育の多様な方法を探究する過程で、理論と実践を繋ぐ保育方法、内容の学びが蓄積されていったと思われる。育ち合った充実の4年間であった。

また、聖和キャンパス内にある元10号館の寮内に山川先生の生活の場が在り、寮生であった私は先生とよく言葉を交わした一人であるが、2～3人同室、寮内の清掃や食前の配膳、食器洗い当番、祈祷会、クリスマスのキャロリング等の体験が、キリスト教保育、チームによる保育に通じる素地となった。

私たちの学生生活には、日常的に先生方、職員の方々との身近な関わりがあり、個人の理解に即した指導に努めてくださった実体験が、保育者現場での「一人ひとりを尊重した理解から始まる保育の専門性の育成」に繋がったと実感している。

この聖和キャンパスの人的環境は、現在の関西学院大学教育学部においても不易な教育力として学生の内面に浸透し育まれていると思われるため、この文化は、いつまでも継続することを祈念したい。

大学教員に就任して担当した「キリスト教保育」では、理論と共に演習として「全学生とのクリスマスページェントによる礼拝」を行った。実践後の感想、記述は、神様の愛の証として多くの人が待ち望み馬小屋で誕生した幼子イエス様の姿から、自分を含めた一人ひとりの命の尊さを改めて実感した。誰が主役でもない、誰が欠けても成り立たない、私たちの人生も同じではないだろうか。これから、感謝から始まる生活を考えてみたい。助け合う存在として生かされていること、自分の人生についても考える機会になった等。それぞれの学びを感じた。

神様に導かれ、キリスト教主義に基づく保育、養成校での働きの日々に、多くの同僚の方々、教職員の方々のご指導、ご配慮を賜りながら生かされた日々深く感謝申し上げます。